

## 年収200万円以下が20%超え 子どもへの貧困の連鎖も問題に

パートやアルバイト、契約社員である非正規雇用労働者は、増加の一端をたどっています。平成元年には約800万人でしたが、平成29年には約2千万人と1千200万人増加しています。一方、正規職員は平成元年の3千400万人から増減していません。

非正規雇用労働者が増加していくなかで、年収200万円以下の人の割合も増えていきます。平成15年（2003年）に200万円以下の人の割合

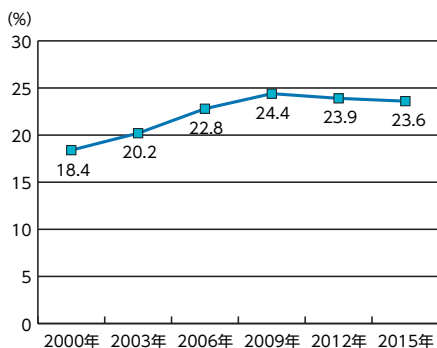
が20%を超えて以降、そのラインを上回っています（左表）。こうした収入格差を背景として、経済的に困窮し、最低限度の生活を維持できなくなるおそれがある生活困窮者への経済的、社会的支援が求められています。

親の収入格差が子どもたちにも影響を与え、生活保護世帯の子どもの大学進学率は全世帯平均の半分以下である19%にとどまっています（平成26年度厚生労働省調べ）。教育機会の格差により、親から

子への「貧困の連鎖」にもつながっています。ここでは、生活困窮の背景や課題、その支援について専門家の意見をお伝えします。

### 年収200万円以下の割合の推移 (給与を所得している者の中)

国税庁「民間給与実態統計調査」  
1年を通じて勤務した給与所得より



大阪人間科学大学  
社会福祉学科准教授  
佐光 健氏

### 生活困窮の原因は低収入以外にも

生活困窮の原因の一つは、非正規社員の増加にあります。現在の日本の雇用形態は、37%が非正規社員で、うち14%が正社員になりたくてもなれない「不本意非正規」です。そして、非正規社員の賃金は正規の社員と比べ、67%程度となっており、賃金格差が生じています。

また、生活困窮は全世代に関連する問題にもなっています。自立相談支援機関の相談は、子どものいる現役世代の世帯は約3割、65歳以上の世帯は約2割で、失業や離職以外の相談も多くあります。収入の問題だけでなく、家計管理も重要なポイントです。食べ物に困った経験は、家計のやりくりが苦手な人が多い傾向にある、独居の高齢男性の方が、女性と比べ、多くなっています。

社会変化による問題として、核家族化が進んだことで、家族の支えや近所付き合いが減少したことによる、子育てや介護の負担増もあります。

### 子どもの生活困窮は貧困の連鎖

生活困窮は、子どもにも大きな影響を与えており、困窮家庭の子どもが、大人になっても困窮から抜け出せない「貧困の連鎖」が問題となっています。

生活困窮世帯の子どもが、経済上の理由などから高校中退や中卒の最終学歴となると、正社員としての就職は非常に困難となると思われます。ある調査では統計上、そうした状態からの正社員への就職は1割にも達しません。ほとんどが無職もしくはアルバイトでの雇用となってしまう。一方、大学および専門学校卒は7割以上の就職率となっており、歴然とした差が生じます。

### 包括的な支援が必要

このように多様な原因のある生活困窮者に対しては、経済面だけでなく、包括的な支援が必要となります。

市などに設置されている自立支援相談窓口は、経済的な支援との印象が強いかもしれませんが、それ以外の相談も受け付けています。行政サービスに繋ぐだけでなく、地域社会に繋ぐ支援も行っています。

自分だけでなく、家族や知人が悩みを抱えている場合は、ためらわず、まずは相談に行くことが重要です。

## 学生ボランティアと生徒が集う場



市は、「勉強方法などを教えてもらいたい」「学校以外に勉強する場を見つきたい」といった悩みがある子どもたちに、大阪人間科学大学と連携して、学習支援を行っています。

週に1度、市内の公共施設に同大学の学生ボランティアを派遣し、中学生を対象とした学習支援や居場所づくりを担っています。学生は、生徒の勉強を見るだけでなく、主体的に季節のイベントなどの催しも行っています。

## 大阪人間科学大学の学生ボランティアの声

社会福祉学科4回生 片山 翔太さん



皆が少しずつ心を開いてくれて、笑顔になっていくのを見ると嬉しいです。生徒だけでなく、自分の居場所にもなり、感謝しています。

子ども保育学科4回生 小寺 はるなさん



中学生は勉強や友達のことなど、思春期で難しい時期だと思います。親に言えない悩みでも、聞いてあげられるこの場所はすごく良いと思います。

子ども保育学科3回生 磯谷 真季さん



最初は目も合わせてくれず、返事もない事もありましたが、少しずつ笑顔や会話が増えていったときに、やりがいを感じました。

子ども保育学科3回生 前山 知輝さん



ここは勉強を教えるだけでなく、生徒との距離が近くて良いと思って参加しました。皆の居場所作りの一端を担えればと思います。

社会福祉学科3回生 山野 芙美さん



皆にぎやかで、すごい楽しい場所です。中学生にとって、私たち大学生が、あこがれの存在になれば嬉しいです。

### 学習支援で共に成長



大阪人間科学大学 子ども保育学科教授  
柏原 栄子氏

大阪人間科学大学が市内中学生の学習支援に携わるようになって、今年で4年目です。週に1度のこの時間が、生徒と学生それぞれの学びの場になり、生活の一部にもなっています。毎年、卒業していく中学生を

見ると、生徒の成長を実感し、学生が生徒たちに真摯に向き合ってきた姿を思い出し、感動しています。

学習支援を通して、「人は人との真剣な関わりの中でこそ成長し、発達が遂げられる」ということを感じました。

また、こういった場を提供し、生徒や学生を見守ってくれる摂津市の行政、教育機関などの役割も重要です。この学習支援の場が、生徒・学生のいつでも集える場所として、これからも続いてほしいと願っています。